

公開協議会（シンポジウム）

「 ひきこもる青年たち - 今私たちに問われていること - 」

日時・・・平成15年3月16日 13:20～16:15

会場・・・岩見沢市自治体ネットワークセンター 4F・マルチメディアホール

内 容

- P 1 シンポジスト発言
＜自助グループ“あるがまま”代表 高尾晋＞
- 3 シンポジスト発言
＜不登校の子どもをもつ親の会“トボス”代表 門前真理子＞
- 6 シンポジスト発言
＜レターポストフレンド相談ネットワーク・ひきこもりホットライン代表 田中敦
- 9 シンポジスト発言
＜青少年自立支援センタービバハウス代表 安達俊子＞
- 12 座談会
司会 北海道大学大学院教育研究科助教授 間宮正幸
シンポジスト 高尾晋・門前真理子・田中敦・安達俊子
- 16 指定発言
岩見沢保健所地域保健推進課主任保健師 成田直子
- 18 フロアとの意見交換
司会 道立精神保健福祉センター相談部長 阿部幸弘
- 22 シンポジストの連絡先

- | |
|-----------------------------|
| 1 なぜ私は“社会的ひきこもり”と関わることになったか |
| 2 現在私がやっている活動 |
| 3 これからの支援について思うこと |

1 私自身がひきこもりの経験者です。今35歳で新聞記者ですが、高校に半年いったあと16歳から21歳までひきこもっていました。とりわけ前半3年間は完全な引きこもり状態でした。後半になるとたまには家を出ることができるようになり、大検を経て23歳で大学に入りました。大学に入ったものの周囲との年齢的なギャップを感じたし、なかなか自分のことを話せず苦労しました。特に最初は不安で不安でたまらなくて入学を辞退しようかと思ったくらい悩みました。入学式の光景を想像してもらおうとわかんと思いますが、新入生を歓迎するサークルの人たちがたくさんいてビールを配ったり、勧誘活動していたりしますよね。そんな中に自分が入っても声をかけてもらえないんじゃないだろうか、とか思う。大検予備校は同じような境遇の人たちと勉強するわけですからあまり気にはならなかったんですが、所謂ごく普通の人たちの中に入っていけるだろうかという恐怖感がすごくありましたね。

そんな体験から同じような経験をしている人たちと交流できる場があったらいいなあと思うようになりました。また今から3年ほど前の2000年前後に、京都の日野小学校事件、新潟の少女監禁事件、佐賀のバスジャック事件などいろいろな事件が起こり、容疑者が引きこもりの状態であったと報じられました。私も経験者の一人として、引きこもりに対して偏見や誤解が世間に広まるのではないかという危機感をもったわけです。そんなことから当事者、家族、専門家などさまざまな人との出会いもあって、引きこもりの当事者の集まりを始めたわけです。

2 “あるがまま”は3年前の5月に始めました。一口に引きこもりと言っても様々で、ここに集まってくる人たちのなかには、所謂引きこもりの状態にある人もいれば、定義的には引きこもりと言えない人もいます。でも今現在人間関係で悩んでいる人であったり、援助者の立場の病院のワーカーさんであったり、様々な人が同じ立場で雑談して過ごしています。そんななかでいろいろな出会いがあり、刺激があり、自分と似たような境遇の人と巡り会ったり、逆に自分とまったく違う人と出会って「ああ、こういう人もいるんだ。僕ももうちょっと生き方や歩み方を変えられるかなあ？」と思ったりするわけです。最初から何かの結果を求めるのではなく、とりあえず他の人たちと出会ってみる、という場なのです。札幌の人ばかりでなく十勝、旭川、岩見沢、たまには道外の人も来ます。北海道は広いですから各地域にこうした当事者たちが気軽に集える場所があればいいですね。

僕のようにひきこもりを経験した大学生、大学院生で参加している人もけっこういます。学校では話せないようなことも仲間同士で気軽に話せる。引きこもりから抜け出したあと、どんな障害が待ち受けていて、どうやってそれをクリアしたらいいのかは、実際にその道を歩いた人でないとわからないんです。その道を歩いていく厳しさ、辛さは、経験者でないとわからないと思います。そういった経験者が同じ道をあとから来る人た

ちのために自分の体験を語り、励ます、またいろいろな情報を交換する、“あるがまま”はそんなところにも役立っていると思います。

- 3 引きこもりの人に対する関わり方、支援のあり方ですが、引きこもっている最中というのは私自身に置き換えてみると、その時は本当に誰とも会いたくない、誰が来ても会わない、そういった心境でした。こういう活動をしているとよく親御さんから「まだグループには来られないので家に来てほしい。」とお願いされ、実際に行ったこともありますがなかなか難しいんですね。ご本人に「他の人に会いたい」という強い思いがあれば別ですが、親御さんの思いだけではうまくいきません。継続的に訪問できたりとか、“あるがまま”に来れるようになったことは今だにありません。ですから基本的には待つ姿勢しかなくて、とりあえずは一人で苦しいだろうけど、もがいて、ようやく小さな勇気が芽生えて、思い切って飛び出そうとした時に“あるがまま”のような場所があることが役立つのだと思います。そこに来られたことを共に喜んで、歓迎してくれる仲間の存在がベストの支援なのかな、というふうに感じています。

引きこもりから抜け出すこともたいへんですが、抜け出してからのほうがすごく困難な道のりです。また躓いて元にもどってしまうという例も聞くんですね。これは僕自身も身にしみて体験したことです。“あるがまま”の活動のところでも言いましたが、経験者たちが具体的な情報交換をすることがやはりとても大切になってくると思います。例えば大検という経歴が就職に際してどうなのか、どこの企業がどのように差別するのかなど、そういった情報もほしかったですね。

先日苫小牧で初めて引きこもりに関する講演をしたのですが、結局、「どうすればいいんですか？」っていう質問になる。絶対やってはいけないことというのはわかるんですが、こうすれば絶対いいよ、というものはなかなかない。それは人それぞれなんです。しかし最終的に辿り着くべきところはわかっています。それはこの“あるがまま”という言葉が表しているようにあるがままの自分を受け入れることだと思います。ちょっとくらいだめな自分でも、弱い自分でも受け入れる、そういう境地に達しないと苦しいだけです。でもじゃあ、どうやってそういう境地に達するかというと僕もよくわからない。わからないけど、5年という月日をかけていろいろな出会いによって、生きていく意味に気づかされ、「生きていってもいいんだ」と感じるできるようになりました。結局、いろいろな挫折を経験している人たちがどうやって生きてきたかということを含み隠さずお互いに話し合うことから、何かヒントが生まれてくるのではないかと思います。

シンポジスト発言 不登校の子どもをもつ親の会“トポス”代表 門前真理子さん

1 “トポスの会”の成り立ちと活動

2 会の活動を通して感じたこと、わかったこと

(不登校・ひきこもり当事者、家族に何が必要か)

1 不登校の子どもをもつ親の会“トポス”の代表をしています。トポスというのはギリシャ語で「居場所」という意味でして、引きこもりという現象だけに限らず、いろいろな形で学校に行けなくなった子どもたちの親の居場所が“トポス”です。私の娘は今、二十歳になるんですが、小学校6年生の時突然学校に行けなくなりました。2歳上の息子がいますが、その子も中学2年の時から学校に行き渋るようになり、2人とも家に居るといふ時期が2年ほど続きました。「私が親の会を作るんだ」という気持ちはなく、「誰か作ってくれる人がいるんだったら・・・」と新日本婦人の会というところから呼びかけられたことからスタートしました。親の会は月1回の例会ということで第3日曜日の午後に集まっています。実は今日、この時間帯で例会をしています。役員が何人かいるものですから例会に行く人、このシンポジウムに来る人、と手分けしました。例会を欠かさず続けていくということが大事ななと思っています。

親たちは突然我が子が学校に行かなくなったり、引きこもったりしますと、皆、やっぱり最初は自分を責めるんですね。私の子育てが悪かったんじゃないかとか。学校に行けない子どもたち自身も自分を責めて毎日つらい思いをしている。私たち家族も、もがけばもがくほど蟻地獄に落ちるような心境になり、家族は会話も成り立たなくなり、まるで今まで形があったジグソーパズルがバラバラになってしまうかのような時期を何年か過ごしました。本当に私たち、親の会をやっていてガス抜きになっていると思うんです。私は働いていたので仕事に行っている間は子どもを見る機会、時間がないんですが、3年前に仕事を辞めましてうちにいるようになりました。そうすると1階に私、2階に子どもがいるんですが、同じ家の中にいるというだけですごくガスがたまる・・・という言い方はおかしいですが・・・どんよりとした空気が流れていくんですね。それで例会に来るとガス抜きになり、ほっと息をついて「さあ、これから帰ってご飯支度をするか。子どもたちと向き合うぞ」と思えるようになる、そんな生活でした。

私たちの会は札幌にあるのですが、結成時には全道各地、網走市ですとか豊富町など例会に来られない遠くの方たちの申し込みもあり、100名近くが集まりました。2ヶ月に1度会報を発行していますが、それが届くだけでも違う、と言っていたいています。不登校という文字が入っていると子どもが嫌がるということで“トポス”という名前しか入っていない封筒で送っています。会員名簿というのもし発行しておりません。例会では会員の方たちに「ここで話されることはプライバシーに関わることなので外ではお話ししないでください。」とお願いしています。そんなことで7年目になりました。親の会に来ている人たちというのはお隣近所でもないし、親戚でもないし、『不登校の子どもを持っている』というのがただ一つ的一致点です。ですから肩書きも役職も全く関係なし。学校の先生もおられるし、エリートサラリーマンかなというお父さんもおられるけど、自分は一人ぼっちじゃない、お互い様だよ、って支え合っているな、という感じです。特定の誰かに支えられているのではなく、なにかこう、皆で「困ってい

る時はお互い様」という感覚で一緒に荷を分かち合っている、そんな感じがしているんですね。親が安心するとその安心感が子どもにも伝わって「今の自分でもいいんだ」という思いが育つように思います。私たち親の会の、これは一つの合い言葉になろうとしているんですけど、「信じて、任せて、待つ」ということが大事なんだというふうに思っています。みんな、違っているから面白いはずなんですよね。同じ人間ばかりだと面白くない。違いを認め合うのがとても大事なことだと思います。「無理をしないでぼちぼちでいい」ということ、これも合い言葉にして今まで続けてきました。その時々例会で出される親の声や疑問を大切にしながら年に3回ほどですが、講演会とかシンポジウムという形で学習会もしてきました。実は今日お隣にいらっしゃる田中さんとお会いしたのも、2000年の9月に開いたシンポジウムにシンポジストとして呼び出されたのが出会いでした。

- 2 その2000年9月のシンポジウムは、当時学校は卒業したけれど社会に出られなくなっているという子どもさんをもつ親が私たちの例会に来たのがきっかけです。ところが不登校ではないので、やっぱりちょっと違うかなあ、引きこもりをどういうふうに考えたらいいのかなあってということから、それじゃあ学習しようということを実現したのです。その時に「相談できる場所がありません」「親が全部抱え込んでいます」「親の居場所はあるんでしょうか?」「子どもの居場所は?」「専門家との連携はどうなっているんでしょうか?」といった様々なことが出されました。で、公的に相談できる場所というの・・・精神保健福祉センターなんですけど・・・私たちは初めて知りました。親が全部抱え込むのがしんどいことは皆、経験していましたが、年齢が高くなるともっとたいへんなのかなあ、と思います。親の愚痴の吐き出し口が必要ですし、ご本人が社会に出る準備をする場所も必要だろうな、と思います。専門家との連携という点では、専門家だけではなく親以外の第三者の援助がやっぱり必要ですね。

私たちは年に一度全道親の会の集いを開いていまして、去年は第5回目で、全道25町村から160人以上の方が集まりました。親の会も24カ所の親の会と連携がとれています。それでこの集いにあわせて約100カ所の支援の機関や相談機関の一覧を作りました。全員にお配りしているわけではないのですが、本当に困っている方、必要な方に届くようにと発行したものです。また私たち親の会に参加している子どもたち自身も今、動き始めています。子どもといっても会を作ってから7年もたつうちに義務教育は終わってしまったという子どももいます。「学校に行けなくても子どもの自立に必要な時間なんだ。だから家庭が居心地のいい場所になることが大事だよね。」そういうことを話し合いながらきました。子どもは親の付属物ではないということ、一人の人間として認めなければならないこと、こんな当たり前のことに気づかされました。特に子どもが小さい場合、親が無理矢理引っ張って連れて行ったよねって、そういうことも振り返ったり、子育てのマニュアルなんてないものね、と一緒に話し合ったり。不登校だった子どもたちは、義務教育終了後高校進学するとか就職する人もいます。でも途中で挫折して引きこもってしまうこともあるし、卒業後もそのまま家にいるという人もいます。

家庭も子どもの居場所です、と言われて初めて「そうだ」って気がつくし、親との関係を作ることが基本だとは思いますが、先ほども言ったように、家族以外の第三者に

認められることも大事です。親との関係だけでは自己肯定感というのはなかなか育たないというか、育ちきれないのかな、というふうに思っています。子どもたち自身が自分たちで居場所を作ろうと動きだし、2001年11月に“ちせ”という会を作りました。今は中学生を中心に5～6人が集まっています。いろいろトラブルがあったり、話し合いがうまくいかなかったり、それぞれの思いが十分伝わらなかったり、はあるんですが、ぎくしゃくしながらも集まることで、だんだん家の外に出られるようになった子もいます。ちょうど土を耕して・・・親たちが土で・・・そこにぽこっと芽が出てきているような感じ。それぞれどんなお花が咲くのかわかりませんが何か芽が出てきているような感じがします。

ここでいくつか気づいたことを申し上げますと、家庭にいる子が社会に出る準備をするためのサポート機関が少ないな、ということを感じています。不登校というのは学校との関係ですから、「学校に来ている」とか「来ていない」とか社会に出る窓口の一つとして学校で把握しているんですが、学校を卒業しちゃうと、どこも子どもの状況を把握してくれるところがないんです。全部家庭で抱え込んで何処にもSOSを出すところがないのかなあ、と思ってしまいます。子どもが動き出すのを待たなくちゃいけないと思っても、やっぱり苦痛で、どこか相談するところはないかと思うんですよ。親同士がつながって、ガス抜きをしたり今までの価値観とは違ったものを発見して、「こういう人生もあるんだね」と思えるようになることも大事です。ネットワークというのは形でなくて人と人とのつながりだって今、思っています。今年(平成15年)の8月に「第8回登校拒否・不登校の問題全国の集い」というのが札幌で開かれる予定になっています。出会いの場、学びの場として多くの方に参加してほしいと思っていますので、ここにおられる方で情報を得たいという方がいましたらどうぞご連絡下さい。私の話は以上です。

シンポジスト発言 “レターポストフレンド相談ネットワーク” 代表 田中敦さん

- 1 “レターポストフレンド相談ネットワーク” の設立と活動について～なぜ今、手紙という手段なのか
- 2 相談内容から考えること
- 3 ひきこもりについての私の提言

1. 私は今、“レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク” というボランティア団体の事務局をやっています。いろいろな活動を日々しているので、いつも自己紹介をするときに困ってしまうのですが、ある時は大学や専門学校で社会福祉の授業を教えたり、ある時は私自身大学院生なものですから学生になったり、ある時は高校のスクールソーシャルワーカーであったり、ある時はレター・ポスト・フレンドのボランティアであったりと、いくつもの顔をもっているような活動を展開しています。きちんとした定職をもっているわけではなく、あちこちと関わりを持っているわけですが、それだけに自分自身の中に、揺れ動く現代社会のあり様をじかに感じて、歩み続けている部分があるのかなあ、と自覚しています。

“レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク” というのは1999年9月に組織化しました。その理由ですが、それまで関わってきたボランティア活動の中で、高校生以上の方々からの相談が多く持ち込まれるようになってきたこと、なおかつ、電話や直接お会いしてのコミュニケーションがなかなかとりづらいケースが出てきたりして、新たなコミュニケーション手段としてのセクションを作っていくことが利用者側のニーズから求められてきたことでした。「レター・ポスト・フレンド」とあるように、私たちの活動は、“レター”、手紙という形態で交流する活動です。今、これだけの情報化社会にあって、携帯電話、インターネット、電子メールなど、いろいろな媒体がありますが、私どものところでは、切手を貼って出す通常の手紙による相談件数が実は圧倒的に多く、全体の9割を占めています。送られる方は、全体の6割がひきこもり当事者本人、残りは家族やその関係者からです。電話だと保護者等からの相談が多いのですが、手紙だと当事者本人の方から送られてくることが多いんですね。なぜかなあ、と思うんですが、活動をすすめる中で感じたことの1つは、ひきこもりだとか人間関係に疲れた人にとって、手紙のやりとりの時間というものが非常に大事な時間になっている部分がある、ということです。速さや効率だけを求めれば、携帯電話や電子メールの方がいいわけです。切手を貼って投函して事務局へ届く、そして返事が返ってくるまでには何日かかかります。でも時間に追われて、ノルマをこなして、大人も若者も忙しく過ごしている現代社会に疲れてしまった人間にとっては、あえて時間のかかる手紙という手段がプラスに作用するんじゃないかと思えます。

もう一つ考えられることは経済的な問題です。手紙を出してくる方々の中に、パソコンなどの情報機器をもっていないとか、買えない維持できない、使い方がわからないとかという現実があるからなんです。このあたりは北海道という社会経済状況が大きく反映している部分があるのではないかと。生活保護世帯を見ても北海道は20%ぐらい、人口にして千人に20人ぐらいの割合です。家庭経済的に欲しいと思っても買えない、または情報機器があってもどう操作していいのかわからないという状況があります。この

あたりはデジタル・ディバイド、情報格差ということが言われ、情報機器を使用できる人とできない人とに分かれ、その格差が広がっているという現象が今の日本社会に作り出されているということなのではないでしょうか。私の諸活動を通して情報機器を有効に活用して情報を集められる人と、全く情報を入手できない人がいる、そういう現状が見えてきたように思います。

2. 相談内容ですが、全体として「不登校」「ひきこもり」が多く、46%程です。その他には「いじめ」「対人関係の悩み」「人生相談」などもあります。20%程北海道外からの相談がありますが、これをどう見るかということ、地元の地域では知られたくないとか、地元の手紙で相談できるところがないなどから、あえて地元ではない地域に相談してくるのではないかと考えています。年齢的には一番多いのは、20歳代の若者たちですが、10代、30代、40代の方もいます、ひきこもり相談の最高齢者は53歳です。これを言うと53歳までひきこもっていたのかと思われるところがありますが、そうではありません。社会に出て就職後、リストラや会社の倒産、職場の人間関係での躓きから、ひきこもってしまうこともあるのです。

ひきこもり当事者からの相談の内容で多いのが、「孤立感」ですね。友達がいないとか、親兄弟にわかってもらえないという訴え。それから何かしたいと思うんだけども実際には動けないイライラ感、いわゆる「焦燥感」の訴えも多いです。同世代が次々と就職したり結婚したりしていくなかで自分だけが社会の中で取り残され、落ちこぼれていくんじゃないかという不安が常につきまといます。あとは「年齢」ですね。年齢によって縛られてしまう。こんな年齢になってしまった、もう駄目じゃないか、死んだ方がいいんじゃないかという「絶望感」の訴えも多く感じます。

3. 私が活動していく中で感じ、伝えたいことを思いつくまま3つ最後に述べたいと思います。1つは「今できることを大切にすること」です。これはひきこもり当事者本人にとっても家族にとっても支援者にとっても同じく言えることです。豊かな社会に起こる現象もあるし、貧しい社会に起こる現象もある、ひきこもりが今ある社会の中で起こっている1つの現象であるとすれば、それを真摯に受け止め、今できることを大切にしていける必要があるのではないのでしょうか。社会の中で「曖昧な生き方は駄目だ」という風潮が非常に強いところがあるように思います。私自身もいろいろなことをして定職をもっていないのですが、今の社会の中では若者がそういう生き方をせざるを得ないこともあるし、その曖昧さから安心と希望を見いだしていく努力をして、可能性を引き出していくことも大事だと思います。

ひきこもりや行き詰まっている状態にあるとどうしてもすぐに成果や結果を求めてしまいがちですが、成果や結果はすぐにやってくるものではないです。曖昧さの中でいろんな経験をしたり、いろんな活動をしたりして、それは決して無ではなく、いずれ何かの形に結びついていくのだと思います。今やっているプロセスに目を向けて取り組んでいくことが非常に大切ではないかと思うのです。

二つ目は「ひきこもっている人の気持ちに出来る限り『近づく努力』を惜みずしていける必要があるということです。高尾さんも話されていたようにひきこもりの苦しみと

か辛さはひきこもり当事者本人あるいは経験者でなければ、なかなかわかりません。それはそうだと思います。しかしそれがすべてではないです。経験者であってもその経験は多種多様ですから、経験者があたかもすべてを理解できるというわけでもないと思います。私も不登校を経験しましたが、そのときから5年、10年、20年と経過しますと、ある意味で過去のものになってしまいますから、私はあまりにも経験者である、ということを経験するつもりはありません。

5年前や10年前と今とは置かれている状況も違うし、今、ほんとうに苦しんでいる渦中にある、ひきこもり当事者本人、ご家族の思いはその人でなければわからないこともたくさんあります。大切なのはそういう人たちがいる、ということのを少しでも気にとめること、そしてその人たちの思いに『近づこう』という気持ちであり努力ではないかと思えます。一人でも、そういう気持ちや努力に結びつく人たちが多くなることを願っています。

最後になりますが、三つ目として、「ひきこもりを続けることによる社会的不利益の問題」です。ひきこもりそのものが悪いとは思いませんし、ひきこもった時間や経験が次のステップにいかされていくことは必ずあると思えます。ただ、問題なのはひきこもり続けることによってその先の進路が阻まれたり、選択肢が狭められたり、長期化するがゆえに次へ進むことが難しくなってしまうことです。今の社会では即戦力になる人材を求めます。やはり社会に対してもアクションしていかなければなりませんね。ひきこもり当事者本人が努力してできる部分もあるし、家族が努力してできる部分もありますが、それだけでは駄目なんです。ひきこもり経験者や社会で躓いた人たちのやり直しを認め、支援していくシステムを作り上げることがこれからの社会にとって大切なのではないかと私は考えます。

私も不登校を経験してきて、そして高尾さんも茨の道を歩いてきてという話がありましたが、そういう話を聞くと非常ズキッとくる部分があります。それだけ経験者の置かれている状態が厳しいということなのです。無論、ひきこもりだけがそうではなくて、今の若者に共通する課題ではないかとも思います。若者たちは非常に厳しい時代に置かれて、どう進んでいけばいいのか、何が幸せなのかを問われる時代に生きているのではないかと思います。その意味でも私も揺れ動きながら活動してきたわけですが、これからも、こういった活動に参加していきたいし、少しでも当事者の気持ちに近づき、少しでも役だっていけばと思うし、そうすることが私自身の成長・発達にもつながっていくのではないかと考えています。支え合う社会を求めていきたいと思えます。

シンポジスト発言 “ 青少年自立支援センタービバハウス ” 代表 安達俊子さん

- | |
|-----------------------|
| 1 ビバハウスの紹介 ~ ビバの若者たち |
| 2 ビバハウスの紹介 ~ ビバを支える人々 |
| 3 実践を通して見えてきたこと、考えること |

1 . 「一人ぼっちの若者を作りたくない。自分は微力だけど今、元気をなくしている若者にそっと寄り添うことで後ろから支援できたらな」そんな願いを込めてビバハウスの取り組みを開始しました。今日はそんなビバハウスの様子をスライドを交えてご紹介したいと思います。青少年自立支援センタービバハウスは余市町郊外、小さな小高い丘の上の「NPO法人余市教育福祉村」というところの中にあります。春から秋にかけては川の流れと鳥のさえずりで目が覚める、緑豊かな自然に囲まれての生活があります。

極度の対人恐怖症で常に緊張状態に陥る若者たちの心と体を解きほぐすために、まずお互いの人間関係づくりを心がけています。二人でペアを組んでの食事作りもその試みの一つです。皆で一つのテーブルを囲んで食事をするのも大切にしています。ビバハウス内に設けているビバスクールでは、合気道の教室とか農作業実習などいろいろな取り組みをしています。その他には食後に将棋やオセロゲームを楽しんだり、四季折々の行事、誕生会、一泊旅行、こういったものを通して若者同士の心の距離はどんどん縮まり、仲良くなっていっています。昨年は北星大学のボランティアの学生さん、札幌学院大学の富田先生のゼミの皆さん、和歌山大学の皆さん、全国に先駆けて行政、医療、民間がタイアップしてひきこもり専門相談窓口を開設している和歌山県田辺市の皆さんなど、さまざまな方たちとの交流で、若者たちは大きな刺激を受け、大きなきっかけを与えていただきました。また「一緒にブルーベリー摘みをしませんか」と呼びかけましたところ、北海道立精神保健福祉センターの青年グループの皆さん、余市保健所のデイケアの皆さんが来てくださり、若者同士の交流が実現しました。

こうして元気、やる気、勇気を取り戻しつつあるビバの若者たちの今一番の願いは「働きたい」ということです。町内の独居老人のお宅の除雪ボランティア活動、お祭りの奴さんのアルバイトなどを通して少しずつ力をつけて、今、隣町の仁木町にあります「いわた椎茸園」で年間を通して椎茸栽培の仕事に精を出せるまでになりました。収穫した椎茸は余市郵便局の協力を得て「ゆうパック小包便」として全国に発送されています。今日ご参加の皆様にも今後お買い求めていただいて、若者たちを応援していただきたいと思います。希望に胸をふくらませている若者たちです。今後ともどうかご支援をお願いします。

2 ビバハウスはオープンして2年半になります。この間、2階の増築工事も完了しまして、正規の入寮者、短期試験入所者、見学訪問者、卒業生などの宿泊用も兼ねて12室を設けています。現在、私と夫、ほかに北星余市高校卒業の女性ボランティアスタッフ1名、さらにこの4月からは町内の医療機関に勤務している男性ボランティアスタッフが加わりました。この方にはビバハウスのホームページの管理人も努めていただいています。

ここでもう少し詳しく利用している若者たちの状況を説明しますと、現在正規利用者は男性7名、女性1名、ほかに大学の春休みを利用しての充電ということでの短期入所

者1名、短期試験入所者2名と一緒に生活しています。年齢は26歳から36歳。2,3年から10年という期間ひきこもっていたという体験をもつ人が殆どですが、ひきこもりの体験はないけれどさまざまな理由で社会的自立に困難を抱えているメンバーもいます。若者たちの約8割が小樽市立第二病院の精神神経科に通っており、そのことからグループホームの認定もいただいています。

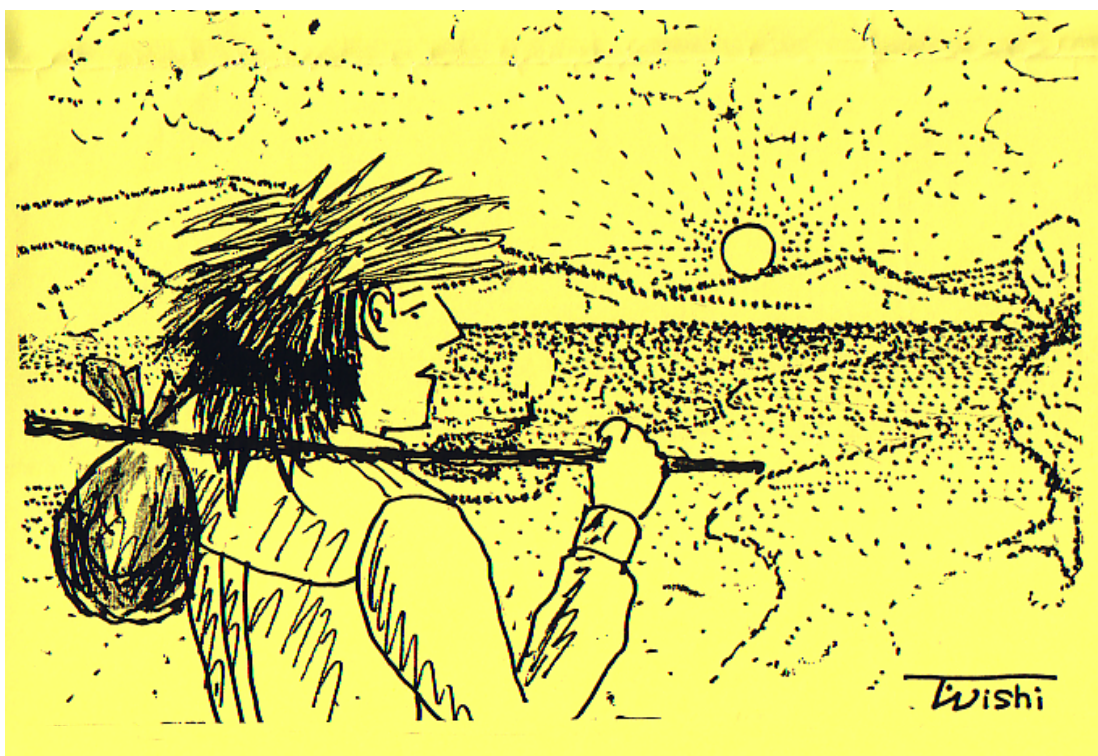
ビバハウスは「青少年自立支援センター」としての使命を果たすために日々努力を続けています。いろいろなところから様々な人たちが来て関わることで、いい意味で作用しあってお互いの成長を促す結果になっています。ビバスクールもその一つで、小学校の先生を退職された方に責任者をお願いしました。私たちは「ビバスクールの校長先生」と呼んでいます。施設内にビバスクールの場所を確保し、個々人の希望に合わせて、教科学習、芸術活動、園芸、スポーツ、ゲームなどを盛り込んだプランをたてています。このような活動を地域のボランティアの方たちが支えてくれているのです。長期のひきこもりで退化した体力や運動能力を回復させるために積極的に農作業やボランティア活動、その他いろいろな活動に参加しています。

- 3 2年半の実践を通して見えてきたことがあります。これまで私たちが受け入れた若者たちはまさに現在の日本社会の縮図のような多岐にわたる問題を持ちながら、同時に今日の若者に共通する特性を備えていると思います。私たちが日々痛感させられていることは、現在の日本社会の在り方、わけでも教育の在り方がどれほど深く彼らを傷つけているかということです。失敗が許されない教育現場や社会に対し、心の深いところからくる恐れが、彼らをかんじがらめに行っているのです。見る前に飛べどころか、飛ぶことを思っただけで、飛べない自分の惨めさが先に立ってそれだけで身がすくんでしまう、そういう状態です。また多くのひきこもりの若者たちは色濃く不登校の影を引きずっています。不登校はある意味、日本の教育に対する限定的な拒否反応と見ることができると思いますし、年齢に関係なく長期にわたるひきこもりは、日本の社会そのものへの拒否反応と見ざるをえない。ますます人が生きにくくなっているこの社会で今や誰にでも起こりうるひきこもりの問題は、決して当事者や親だけに解決を押しつけるべきものではなく、社会全体で取り組まなければならない問題だと思っています。

最後になりますが、今後の課題について思うところを言わせていただきます。若者たちの自立に欠かせないこと、それは就労支援です。「若者たちに働く場を」というのがビバハウスの設立当初からの課題でした。北海道がおこなっている「北海道精神保健職親事業」はビバの若者たちにとって今や、欠かすことのできない大切な役割を果たしています。先ほどビデオで見ていただいた仁木町の椎茸園が職親認定され、現在ビバから3名が訓練生として就労しています。訓練生には1日1000円の訓練手当が、職親さんには訓練生一人につき1日2000円の指導手当が公的に支給されます。若者たちは働くことで元気をとりもどします。今、新たな職場や職親の開拓が私たちに緊急に求められています。地域には就労の機会を求めている多くのひきこもりや精神に障害をもつ若者たちがいますので、関係者、関係機関と協力して将来的には、ビバの若者たち以外の若者たちも働ける共同作業所あるいは福祉工場に発展させる必要があると考えています。

また今後、ひきこもりなどを含む精神保健福祉事業の実施主体が国や都道府県のレベ

ルから市町村に移されると聞いていますが、そのためにも今日のような取り組みが全道各地で行われることを希望します。



イラスト：西 卓也
(ハンド&ハンド)

～ 座談会 ～

司 会・・・北海道大学大学院教育学研究科助教授 間宮 正幸
シンポジストの皆さん

自助グループ“あるがまま”代表 高尾 晋

不登校の子どもをもつ親の会“トポス”代表 門前 真理子

レターポストフレンド相談ネットワーク「ひきこもりホットライン」代表 田中 敦

青少年自立支援センタービバハウス代表 安達 俊子

司会： みなさん、どうもありがとうございました。今、世界は大揺れに揺れているのですが、地球も揺れてまして・・・今の地震、お気づきになりましたか？（笑い）今し方の安達報告にもありましたが、やはり、ものすごい社会変動が起こっている中でひきこもりの問題が発生しているということを改めて認識させられました。司会の立場なんですけど、ちょっとだけ私見を述べさせていただき、次に繋ぎたいと思います。

会場を見回すとだいぶご年配の方もいらっしゃいますが、1970年代から80年代にかけて「大草原の小さな家」というアメリカのテレビドラマが放映されていました。今も3度目ですか、再々放送をしていますね。私は若いとき、ずいぶんあれを観ておりました。なぜかという、自分が父親になるとすれば、あのインガルス家のお父さんのようにならなくちゃと、一つの父親モデルと思っていたわけです。ところで、1985年、NHK取材班がたいへんな本を出しました。「21世紀は警告する」という本なんですけど、その第4巻に「小さな家族の大きな崩壊」というのがありました。実は「大草原の小さな家」は実話なんです。4人姉妹の次女のローラさんが自叙伝的にあれを書いたのです。

NHK取材班が何をしたかという、あのインガルス家のその後をたどると、あの物語から100年あまりたった1960年代には実はインガルス家は滅びてしまった、と書かれているんですね。要するにあれほど団結し、愛し合って、大地に根差してきたインガルス家が4代目では誰も残っていない、そのことを取材していました。それが何を意味するかといいますと、その約100年の間にとんでもない歴史上の大変動が起こった、つまり大地が家族を結びつけていた共同体的なあり方から、一人一人が個人的に生きねばならなくなってきたという社会変動を、インガルス家の崩壊が象徴しているわけです。

今、私たちが直面している家族の問題は広く社会変動という視野で見ないと捉えきれないのではないのでしょうか。大地が家族を結びつけ人々を育てていた時代は過去のものとなり、今は、社会がなんらかの形で個人の自立を支援するという、新たな試みが求められているのだと思います。因みに「大草原の小さな家」の著者のローラさんの娘さんはローザさんというんですが、彼女はサンフランシスコに出て結婚し、離婚し、最後は作家として終わります。いろいろな含みをもってNHK取材班の報告を見ましたので、ちょっとご紹介させていただきました。

さて、今度は具体的な話題に移りますが、ビバハウスのビバというのはイタリア語で「人生万歳」の意味ですね。このような生活共同体が個人の自立を支援するのも、今求められている新たな試みの一つと言えると思いますが、ビバの実践をお聞きになってい

て他のお三方はどのような感想や期待をもたれたか、そのあたりをお聞かせ下さい。

門前：私は残念ながらまだ行ったことがないのですが、ビバハウスのような施設はとても大事だと思います。ただ、フリースクールもそうなのですが、お金のある人は入れるけどお金のない人はどうするのかなあ、とふっと思いました。不登校の場合、札幌市内に3カ所適応指導教室がありますが、各区にあるというわけではありませんから、行きたくてもなかなか行けない場合が多いのです。ビバハウスはとても素晴らしいと思うんですが、ここに入れる条件を満たす人はどのくらいいるのかなあ、と単純に思いました。

司会：門前さんの今の話はビバハウスの素晴らしさを認めながらも、経済的な問題と言いますか、公的支援をもっと、ということですね？

門前：はい、そうです。

司会：田中さん、どうぞ。

田中：多様なニーズに多様なサービスを用意するという事は非常に大事だと思います。また多様なサービスが用意できれば、利用者にどんな支援やサービスが適当か、きちんとマネジメントする機能も必要になりますね。それから先ほど門前さんから出ていましたが、施設の利用の形態の検討も必要かなあと思いました。24時間そこで生活するとなると当然利用料も高くなるし、送迎バスとか送り迎えの形が可能であれば通所の利用も可能になるし、週何回利用するかによっても料金は違ってくると思います。完全入所型でなくてもいろいろなサービスができると思うし、そのためにはスタッフを揃えることや、それを支えるきちとした支援費なり保障なりを構築していかななくてはならないと思います。

司会：高尾さんはいかがですか？

高尾：ビバハウスがどう、ということよりも一般論として申し上げたいんですが、今も田中さんから通所型というお話がありましたが、私の個人的な好みとしては共同生活というのが嫌いなんですよね。なぜかというと僕が中退した高校は全寮制、もろ共同生活でした。それが嫌で僕は辞めてしまいました。上下関係がかなり厳しくて、いじめ、リンチのようなものもありましたね。高校中退がクローズアップされている時代ですから、過疎の地域でそういう人を受け入れようとか、いろいろやって結局失敗したり……。最近、ニュージーランドでひきこもりの若者を集めたところで殺人事件が起きましたね。真相はわかりませんが、24時間一緒にいるとやっぱりいろいろ起きちゃうんじゃないかというのが僕にはすごくあって、苦手なんですよ。

僕が目差すのは通所的な形で、あくまでもプライベートな空間がある、そんな形ができるようにしてほしい。これまでの障害者福祉の歴史をみても初めは入所施設中心で徐々に地域で普通に生活することをめざすようになってきました。ひきこもりの人たちが病院や施設に閉じこめられることを僕としてはちょっと危惧しています。

司会：ここで安達さんが言うておられた「日本社会の縮図、とりわけ教育の問題を強く感じた」ということについて実践者のお立場からもう少し強く発言していただきたいのですが。

安達：今の教育は、とにかく「早く、早く」とせかされ、すごいスピードで走り続けることを要求されるような教育です。そしてその中に巻き込まれている子ども達は「失敗したらたいへんだ。自分が壊れてしまう」という恐怖感を強く持っています。余市北星高

校時代、こういうことを言っている生徒がいました。「自分はハイウェイを走っている車のようなもの。疲れたから休みたいと思っても休めない。車を止めたり、スピードを落とすと後ろから追突されて命を奪われてしまう」本当にそうだなあ、と思いました。

「ビバハウスは人生の道場。ここでは失敗してもいいんだよ。ゆっくりでいいんだよ。ゆっくりがいいんだよ。確実に自分の力をつけていこうよ」とそんな風に言いながら生活しています。若者たちに一番必要なのは自信の回復、これがもっとも大切だと痛切に感じています。

司会：引きこもりは今、全国で数十万とも百万とも言われています。実際の数を把握するのはむずかしいのですが、道の保健所の相談件数はこの2年間で倍増したときいています。今の安達さんのお話を聴いていて、時間のゆとり、高速道路でない生活、自信の回復をめざしているビバハウスにひきかえ、日本の社会はなおもその反対の方向に流されているような気がします。ひきこもりの問題はそうした背景にあるものを考えていかなければならないと思います。時間も少なくなっていますが、他のシンポジストの皆さんから、言い足りなかったこと、願わくば迫真のリアリティのある発言がありましたらぜひいただきたいと思います。

田中：私は情報提供機関というものが必要ではないかと思えます。きちっとした、すべての情報、官民問わず、またボランティア的なものも含めた支援の場や活動が、そこに行けばすべてわかる、そういった情報提供機関ですね。そういうところがあって情報が利用者にきちんと伝わるシステムがあるといいですね。これは門前さんあたりはよくご存知と思いますが、親の会でも、ごく小さな、自分の家を開放してやっているなんていうのもあるのではないのでしょうか。でも私たちはそれを知らないわけです。そういったものも掘り起こしてどこかで集約し、それをまたネットワークにしていけることがとても重要だと思えます。

司会：田中さんは連絡協議会のなかでもしばしば情報の問題を述べておられました。大事な観点ですね。他の方はいかがですか？

門前：情報の問題ですが、私も、例えば親の会の情報を、困っている親の方に伝えてほしいと学校にお願いしても、なかなか伝わっていかなかったり、先生方が親の会の存在を知らないことに驚かされたりします。単に親ごさんたちにだけでなく、関係者や周りの人たちにもっと情報が流れなければいけないな、と感じました。「こういうところに行きなさい」ではなくて、「こういうところにも行けるんだよ」と紹介してあげられたらいいですね。親が子どもに「あなたの行くところはどこにもないんだよ」と言うのはとてもつらい。「動けるようになったら、行けるところがあるんだよ」と、なんというんでしょうね。扉が開かれている環境が大事ではないかと思えます。そういう意味で情報を集約してくれるところがあるといいですね。

司会：高尾さん、安達さんはあとなにかございますか？

高尾：今、お二人から情報の話がでましたので、さらにそれをふくらませて。今日は学校の先生たちも多くいらしているようですが、縄張りとかクラス単位とかがあって、なかなか他のクラスの子どものことには手を出しにくいのではないかと思います。同じようなことがたくさんありますよね。保健所の管轄だとか。そういうのはできるだけやめてほしい。それがなくなるともっと選択の幅が広がると思うんですよね。

子どもたちは自分の担任を選べません。お互い人間同士だから、合う、合わないは絶対あると思います。学校以外でいろいろな取り組みをしている人に繋げるのも先生の役割だと思うんです。今回、不登校についても文部科学省が方針転換しましたね。待っているだけではだめで積極的にはたらきかけるとか。待っているだけじゃなく、学校以外にも目を向けているいろいろな人との関係を広げていくことが非常に大切だと思います。

安達：ビバハウスが受け入れられるのはせいぜい10人前後の若者たちです。ですけど全国で100万ものひきこもりの若者たちがいることを考えると、ビバハウスのような、彼らが息抜きできる、楽になれる場所がせめて各市町村に1カ所はできてほしいなあ、そうすればどれだけの若者たちが救われることかと思えます。

司会：私は今、北海道の過疎地域の学校などの調査をさせていただいているのですが、なぜそういうことを細々とやっているかということ、ここ100年間の歴史の中での共同体の構築、逆に共同体の崩壊、そういったプロセスのなかで学校そのものの役割も変化し、それが子どもたちの成長にも影響している、といった関係を見たかったからです。ビバハウスの取り組みの中に地域の椎茸栽培農家での就労がありましたが、その農場主が病気をした時、「青年たちの指導をするために早く病気を治して、頑張りたい」とおっしゃっていた、という話をお聞きしました。地域の人たちは自分の町や村を存続させたい。青年たちを支援すると同時に期待している。そんなふうに関係が繋がっていかないかなあ、と思っているんです。

安達：地域には、いろいろな方面で力をもっている方がたくさんおられます。私たちが積極的にはたらきかけて、若者たちのことを伝え、理解してもらって、応援してもらえる条件を作っていかなければならないと思います。

司会：ありがとうございました。これで前半のシンポジストの方たちの討論を終わります。後半はフロアの参加者の方たちからのご意見もうかがいながらすすめる予定です。後半の司会はセンターの阿部相談部長にお願いします。

～ 指定発言 ～

< 岩見沢保健所地域保健推進課 主任保健師 成田 直子 >

- | |
|----------------------------------|
| 1 岩見沢保健所で開催しているひきこもり家族の会について |
| 2 家族会を続ける中で、保健所が大切にしてきたこと、保健所の役割 |

1 数年前、一人のお母さんが10年間ひきこもっている息子さんのことで相談にみえました。そのお母さんの「同じ悩みをもっている家族と情報交換をしたいんだけど、そういう集まりはないものでしょうか？」という一言がきっかけで、岩見沢保健所のひきこもり家族の会が始まりました。同じような悩みを抱えたもう一人のお母さんがいらして、平成12年6月に、2名の家族が集まってスタートしたわけです。最初は試験的にでしたが、その年の9月からは保健所事業として正式にスタートし、次第に参加家族も増えてきました。今は6～7名の家族の方が集まっています。中にはご自分の地域にはそういうのがないからと、管轄外の遠い地域からいらっしゃる方もいます。

会でどのようなことをしているかですが、意見交換と交流が中心なんです。時々学習会もしています。今日この場にいらっしゃる精神保健福祉センターの阿部先生や、シンポジストの田中さん、高尾さんをお招きしてお話していただいたこともあります。普段の会では、それぞれに悩みを語ってもらったり、古いメンバーが新しく参加したメンバーに「よく参加したね」とねぎらう、そんな形が自然にできあがっています。誰にでも話せることではない悩みを話し、お互い共有することで、家族の孤独感の軽減につながっています。さらに工夫してきたことや努力してきたことを話すなかで、ちょっとしたヒントをもらったり、「自分の関わりが悪かったから・・・」という自責の念をもちがちなんです。そういうことじゃないんだってお母さん同士でわかりあったりします。初めて参加する方は本当に涙ながらの話なんです。回をかさねるごとに笑顔もでてくるし、例会に参加したあとは少し気持ちが楽になるともおっしゃいます。グループの力を借りて、癒されたり元気になったりしているんですね。家族が自らの健康をとりもどし、自分の人生について考えていく力を高めていくことが大事だと気づいていく、そんな風になってきたなという感じです。家族の変化が本人の緊張をとくことにもなり、家族会は間接的に本人の支援にも繋がっていると思います。

2 次に保健所が大切にしてきたこととか、保健所の役割について、6つの点をお話したいと思います。

支援対象は家族である、ということをお大切にしてきました。家族の方が保健所に相談に来るまでにはすごく長い時間を要し、家族自身が精神的、社会的に引きこもり状態になっていたり、眠れないなど、うつ的になっていたりします。つまりそういった困難を抱えた家族の方がまずは支援対象なのです。グループそのものへの支援、グループを利用しての家族支援、個別の家族支援、それらを組み合わせることで効果的な支援ができると考えています。

家族支援を通して本人への間接的支援をする、ということですね。本人にはなかなか

会えませんが、家族の話を継続的に聴くことで、治療の必要性や緊急対応の必要性を判断することができます。家族会に参加しているということを本人に伝えている家族もあるし、はっきり伝えていなくても家族が楽しみに行っていることが雰囲気でも伝わり、それが本人の変化へのきっかけに繋がっていくと思います。

支援ネットを作っていくということです。例えば本人から、どこか集まる場所がほしいとか情報がほしいという希望が出されてきた時に、一つの機関ではとても応じきれません。さまざまな機関の連携が必要だと思います。今日シンポジストとしてお話くださった方たちのところとか、精神保健福祉センターとかばかりでなく、この岩見沢市で地元の医療機関との連携とか地元のサポーターの掘り起こしとかそういうことが必要ではないかと思うのです。どのような資源があってどのように活用できるかという情報をストックして、本人や家族から希望があった時にすぐ情報を提供し紹介していく、という役割が保健所にあるのではないかと思います。

「地域のサポーター」作りをすすめるためにも、ひきこもりについての理解を広げることが目的として、保健所主催の講演会を年に1回、3年間開いてきました。受講された方から「ひきこもることも一つの生き方なんだなあ」とか「ひきこもることが必要な時期もあるんだなあ」等の感想が出されていきました。講演を聴いてから自分なりに勉強しているという方たちもいて、「ひきこもりというのは誰にでも起こりうること。自分も今までにひきこもりたいたったことがあって、気持ちはすごくわかる」「自分も、ひきこもりの若者にとっての出会いの一人になればいいな」というお話をききました。3年間の講演会や今日のこのシンポジウムなどで、地域での理解が少しずつ広がっていることを実感しています。

本人と出会えた時の準備をしておくことです。これはどういうことかといいますと、本人が保健所に相談に来た時に「よく来たね」と本人の勇気をまずねぎらって、緩やかな関係を作っていきたいと考えます。今できることを一緒にゆっくり考えることから始めたいと思うのですが、人と関わる力が弱くなっている方たちだということを考慮して、接近しすぎず、離れすぎず、淡々とした関係作りが大切だと思います。そのためにも私たちの側の関わり方の技術や資質の向上に努めなければならないし、ひきこもった経験のある方たちから学ぶことも必要だと考えています。

最後に、保健所がひきこもりの相談のできる機関だということをPRしていきたいと思っています。相談や対応のできる場所はだんだん増えてきていますが、保健所もその一つだということを、市町村の広報誌や保健所のホームページを利用して広く知ってもらうことが必要だと思うのです。以上のようなことを考えてこれからも活動していきたいと思っています。

～ フロアとの意見交換 ～

司会・・・センター阿部相談部長

・・・フロアからの発言

司会：ひきこもりの問題については全体像を把握して、こうだと言える人は、実践家であれ専門家であれまだ誰もいないと思います。今日話されたシンポジストのみなさん、あるいは我々の意見もその一つであり、さまざまな方たちのご意見をいただきまして、きちんとした考え方を作っていくということがこれから必要ではないかと思います。今日、この場で皆さんと共有できるようなご意見、ご質問をいただければ幸いです。

：「楽しいもぐらクラブ」という喫茶店をしています。ひきこもりや不登校の人たちが、10代のグループ、20代のグループ、30代のグループなどを作って集まりをもっています。また子育てで悩んだり疲れているお母さんのサポートもしており、ひきこもりや不登校の人たちのなかで子ども好きの人たちがお子さんたちの相手をし、その間、お母さんたちにはリラックスして話をしながら過ごしてもらおう、ということをも月1回しています。ワーカーズコレクティブ方式で、ひきこもり傾向の人たちがさまざまな仕事を受け持つことができると思っているのでもよろしくお願ひします。

司会：あちこちで草の根的な活動が起こっているという、一つのご報告なのかなと思ひました。

：札幌周辺のあるマンモス校の小学校教師です。前段の最後の方でちょっと耳の痛い話がありましたので、一言言わせていただこうと思ひます。今回の集まりのことはインターネットで知りました。ある町の不登校児親の会の掲示板に私自身が悩んでいることを書きましたら、こういう催しがあると教えてもらひました。昨日学校でたまたまあるクラスに入ったら休んでいる子が2人いました。子どもたちに聞くと「登校拒否、登校拒否」って言うんですね。子どもたちのなかに、タブーだから聞くな、触るなっていう感じがあるように思ひました。

市町村によって対応に違いがありすぎると日頃感じています。田中先生のお話の中に情報提供機関がきちんとあればいいということがありましたが、なるほどな、ハローワークのようなものがあればいいのかなと思ったり、「馬鹿やろう、俺は学校の先生だから、学校がまずそうならなければいけないんだぞ」と思ったり・・・。私自身が窓口にならなければいけないと思ひました。ある中学校でこの4月から不登校の親たちの集まり、交流がやっと始まると聞きました。そのようにまず困っている人同士が繋がるのが大事なんですね。

それから一つ悩んでいることがあるんですが、基本的には信じて待つ、今できることを大切にする、ということにはなるほどと思ひたのですが、逆に悶々とした部分があります。実際にひきこもりの子どもをもった時に「その状態を変えてみないかい？」、「なんとかしてみないかい？」と言いたいのをどこまで我慢しなければならないのか、とすごく思ひます。待つことを大事にするのはわかるんですが、その上で要求したいことは絶対でてくると思ひます。こうしたらいいんじゃない、ちょっと変えてみないかい、ということはどうなのか、どんな心持ちでいけばいいのかということをも今日の討論でつ

かめればよいなあ、と思っています。

司会：ありがとうございました。学校もある程度情報提供機関になればいいというご発言と、どこまでどんな風に待ったらよいのか、というご質問を投げかけられたように思いますが、どなたかご意見を。

高尾：最近ある集まりで、ある小学校の先生と、その教え子で23歳くらいの方が来ていました。その人はかつて不登校だったという話で、高校にも行ったけど中退、アルバイトとかいろいろやったんだけど結局辞めて、次の道をさがしているということでした。大検をとって大学に行ったという僕の経歴に関心をもったようで、大検のことをもっと詳しく聞きたいということで、僕と3人でファミリーレストランに行っているいろいろお話ししました。その時思ったんですが、小学校時代から大人になっても繋がっているなんてうらやましかった。僕は教師に対して特段悪意もないし、良い思い出もないし、顔は思い出すけど名前は忘れた、という先生が殆どです。だからすごくうらやましい。その時その時にそう簡単に解決できないことが多いと思います。小学校時代のことを中学校にもちこしたり、その後高校にもちこしたり、またその先にもちこしたり。人間同士なんて相性もあるのですが、卒業後も気にかけてくれて、僕みたいな大検の経験者につなげてくれるとか、そういった自然発生的な横のつながりをもっともっとできればいいと思います。

門前：いつまで待てばいいかというのは、よく出る質問なんですが、期限がわかれば苦労しないなと思います。ただ長い人生ですからそういう時期があってもいいのかな、と思うのです。学校の先生というのはせっかちで、とかく「自分が担任のあいだに学校に来れるようになってほしい」とかせっつくんですが、私が思うには、先生はまず親を支えてほしい。先生はどうしても子どもに目がいっちゃいます。子どもが動けないでいる時、親はすごく苦しんでいます。ですからまずそこを支える。何も特別なことをしなくてもいいから、親の悩みを黙って聴いてほしいんです。聴くということはけっこうたいへんなことです。

子どもは子どものペースで自分で自分を変えていく努力をするわけですが、ゆっくりな子はゆっくり変わっていく、その子のペースで変わっていくんだと思います。学校の先生から「ひきこもりになったら困るから不登校のうちになんとかしなければ」という感じで言われると、大人になってひきこもっちゃだめなのかなあ、と思ったりします。自分の心と体が一体になって動き出すまでの時間というのは本当に必要なんだと思います。自分のペースで時間をかけて納得がいて初めて、一步外に踏みだせるようになるということを私は我が子から教わりました。

私は「全国ひきこもり親の会」に所属している者ですが、私のうちの体験を少し話させていただきます。うちの息子は中学1年の2学期から不登校になり、そのままひきこもりましてもうほぼ9年になります。その間全く家から出ず、他の人とも会いません。この9年間、私も自然体でいこうと思い、彼のありのままをすべて受け入れて本人の好きなようにさせています。だから今質問されていた「いつになったら抜け出せる状況を作ってあげられるか」というのには結論はできませんね。この9年間の間に私も2度ほど覚悟を決めました。18歳の時と20歳の時本人を前にして話したことがあるんです。親がいつまでも元気であなたの世話ができるわけではないって。いつ事故や病気で命を

落とすかもわからないし、親の方が年齢が高いんですから先に死ぬのは当たり前だって。親が死んだ後あなたがどう生きていくのかが親としては一番心配だと言いました。息子は黙って聞いていました。ということは本人もそれは自覚しているんです。でも今はまだ飛び出していけない状況だ、というのが事実なんです。だから本人が本当に納得して飛び出すまで親はどんなことをしてでも待つしかない、今は覚悟を決めています。

同じように悩んでいる親御さんがいっぱいいると思います。そういった悩みを解決するのに少しでもお役にたてればと、「北海道親の会」を作るときに参加しました。またピバハウスの運営委員もやらせていただいていますから、ピバの実態もよく知っています。安達俊子先生ご夫妻は24時間体制で、若者たちのためにやっていますからたいへんな事業なんです。公的資金が得られなければ全部持ち出しなんです。だからこういった援助体制のためには公的資金が絶対必要だと思うし、サポーターがたくさんいればいいですね。保健所の成田さんが保健所の体制もすごく大事だとおっしゃっていましたが、私も同感です。いろいろな体制、援助してくれる人、協力してくれる社会ができれば、若者たちは徐々に立ち直ってくれると思うんです。長い道のりかもしれないけど若者たちの気持ちを考えて待ってあげるしかないんじゃないかと思います。

名寄市で「不登校親の会」の事務局をしています。今日、この会を設定した人はたいへん勇気のある人だなあ、と思って参りました。多分いろいろな意見が出て、行政批判も出るんじゃないかと考えていました。民間の方のシンポジストが4人で、指定発言の方が行政の人でした。よく考えてみると実態をよく現しているという感じがします。今日のシンポジウムを聴いたかぎりでは、今、最先端をいくのは実は民間の方々の努力であって、行政は非常に遅れている。岩見沢保健所が一生懸命やっているということが伝わってきましたので、全体を見ないで言うのは失礼かと思いますけど。こういう時代だから、不登校とかひきこもりとかは誰にでも起こる可能性がある、とよく言われますよね。もし本当にそうならばそれは個人の問題ではなくて、国の問題、社会の問題です。民間だけでなく文部行政、厚生行政など行政全部が一体となって真剣に取り組まなければならぬ問題だと思います。

ちょっと横道にそれるかもしれませんが、学校なんかでも、心の相談員を増やすとか適応教室の先生を増やすとかいっても退職校長を当てたりね。退職校長がみな悪いと言っているわけではありませんが、現職の専門家や心理士でさえたいへんなのに、今まで管理職をやってきた校長さんがいきなり心の指導をしようとしても無理なんです。子どものほうが上をいくんですね。勝負は目に見えています。だからもっと基本的なところで子どもの声や親の声にどれだけ耳を傾けるかということに辿り着くのではないかと思います。ひきこもりの青年たちのことにしても、私たちの耳の傾け方、責任のとり方だと思うんです。

岩見沢の保健師さんはたいへんご苦労していると思いますが、行政は9時に出勤して5時には帰られますよね。親は24時間、365日です。何も24時間やれと言っているわけではありませんが、親は本当に頑張っているんです。公的な支援をどれだけ勝ち取れるか、今日お集まりになった民間の私たちから声をあげなければだめだと思います。行政に頼っていたんでは前進しません。今日ここに来た方はいろいろ情報をもらえても、来られなかった方にはどうやって情報を出すんですか？ということまで考えた取り組み

をぜひやってほしい。保健所の数も少なすぎますね。岩見沢でこういうことができたとしても名寄ではどうなのかって思います。以上感想やら激励やらを含めて発言しました。

KHJ親の会はまなすの吉田といいます。私は見たとおりのおいぼれですが、はまなすは立ち上がったばかりの若々しい会なのでどうぞ積極的に参加していただきたいと思っています。私はひきこもって10年になる子どもを持つ一父親です。女房、子どもとうまくいなくて今は家を出まして一人暮らしをしています。定年退職し、幸いにも第二の職場で働いているんですがもし今の職を失った場合、子どもはどうするのかと切羽詰まった状況にいる者です。今そちらの方からお話のあったとおり、何らかの公的な補助や支援をお願いしなくてはならない部分もあります。私は行政にいたのでよくわかるのですが、行政というのはなかなか動きにくいところもありまして、一般住民からいろいろ要望をあげていくことが大事だと思います。親の会はこれからもそういうことで活動していきたいと思っていますので、よろしくをお願いします。

ところで司会の阿部部長さんに一つお聞きしたいんですが、坂口厚生労働大臣が、記者団の質問に答えて「ひきこもる若者たちの支援の一つとして、職親制度を検討したい」という発言があったように記憶していますが、そのへんの具体的な話があったらお聞かせ下さい。

司会：私は国のレベルからいうとずっと下っ端のところにいるので、具体的にこういう対策が始まるという話はまだ聞いておりません。司会者があまり発言するのはまずいと思いつつ、一つお話ししますが、ひきこもり問題でよく発言されている齊藤環先生が言ったことにユニクロとオーダーメイドの話がありました。支援の仕方で、安達さんなんかの活動はオーダーメイドだと思うんです。だからたくさん若者は扱えない。ユニクロはたくさんいろいろな服を安く提供できるということで、ユニクロでもオーケーという人もいます。支援にも両方が必要なんじゃないでしょうか。ユニクロができるのは公的機関。オーダーメイドができるのは地域の草の根活動。ちょっとこれ、分けすぎかもしれませんが、そういう視点でいくと、さまざまな支援メニューを生み出せると思うのです。何か勝手にまとめちゃいましたが、これも一つの視点とってください。

この問題は大きいので「群盲、象を撫でる」ということわざのように、お尻をさわったり、鼻を撫でたりして、同じ象なんだけど違う風に見ていることもあるのではないかと思います。これからもいろいろな話し合いをしていかなければならないと思っています。本日は長い時間お付き合いいただきまして本当にありがとうございました。これで本日の公開シンポジウムを終わります。

シンポジストの連絡先

・自助グループ「あるがまま」 代表 高尾 晋

〒 00100000

札幌市東区北9条東1丁目

小規模共同作業所「共生舎」内

TEL 090 - 1524 - 2902

E-mail takao114@r7.dion.ne.jp

・不登校の子どもをもつ親の会「トポス」 代表 門前 真理子

〒 060-0808

札幌市北区北8条西3丁目 札幌エルプラザ2F

札幌市市民活動サポートセンター レターケース No22

「不登校の子どもをもつ親の会トポス」

TEL 011 - 721 - 2008 (新婦人道本部気付)

・レターポストフレンド・ひきこもりホットライン 代表 田中 敦

〒 064 - 0824

北海道札幌市中央区北4条西26丁目3番2号

TEL 携帯電話 090 - 3890 - 7048

(講義中は出られませんので、お急ぎの方は伝言お願いします)

HP <http://www1.odn.ne.jp/retapost/index.html>

インテーク相談専用 E-mail retapostmaster@yahoo.co.jp

・青少年自立支援センタービバハウス 代表 安達 俊子

〒 046-0002

余市町登町636

TEL 0135 - 22 - 0016 FAX 0135 - 23 - 4285

HP <http://www.geocities.jp/vivahousejp/home.htm>

E-mail vivahouse@mail.goo.ne.jp